

国沢新九郎の画歴と作品

三 輪 英 夫

一

日本近代洋画史の曙光に立つ国沢新九郎（一八四七—七七）は、明治の最初の渡欧画家として知られている。また、短命であったが先駆者の一人に相応しい意義ある業績を幾つか刻んだ。それらの業績は、英国留学から帰国後、麴町平河町に起した画塾彰技堂での実践にほぼ集約されるものである。すなわち、彰技堂における洋画普及がその第一であり、「彰技堂門人帖」⁽¹⁾によれば国沢存命中九十一名にのぼる入門があった。高橋由一の画塾天絵社と双壁をなしたといっている。さらに、彰技堂での教授内容と活動に注目すると、明治初年における一層画期的な洋画普及の實際が窺える。というのは、明治七・八年という時期を考える時、彰技堂で用いられた諸教材、参考図書⁽²⁾の類は、西洋画法学習の上でわが国最初の纏まった「舶来品」であったのであり、また、それらを用いた教授内容の詳細は不明だが、門弟本多錦吉郎の回想（「履歴書」）⁽³⁾からしても、ロンドンでの学習経験を生かしたかなり正則なものであったと推測されるからである。つまり彰技堂は、明治九年創設の工部美術学校でヨ

ロッパ式のアカデミックな教授が開始される以前に、その先駆的役割を多少とも果たしたといえよう。事実、国沢自身文部省へ美術学校設立を⁽³⁾建言したようであり、したがってその構想を抱いていただろう。そのような意味からは、彰技堂はわが国美術学校の意義ある雛型であったといっている。

一方、彰技堂でわが国初の洋画展覧会⁽⁴⁾が開かれたことも注目に値する。一般人への洋画普及という意義は勿論少なくないが、ここに川上冬崖、高橋由一ら洋画家をはじめ当時の主要な画家が訪ね交流していること、さらにそれを契機に洋画進展を語り合う⁽⁵⁾会合をもつこともあったとされるのは、当時の洋画界における「新帰朝者」国沢の位置と役割を考える上で一層重要である。従来の片々たる紹介以上に国沢の存在にはリアリティがあったとみるべきである。そのような視点から、以下に国沢の渡欧前の経歴とその後の画歴、またその作品について述べてみたい。

二

国沢新九郎は、弘化四年十二月二十二日高知城下小高坂越前町に父国

沢四郎右衛門好古、母辰の長男として生まれた。名を好良^{よしか}といい、幼名熊太郎、のち泉、維新後新九郎と称した。長宗我部元親の下で国沢城主をつとめた国沢藏人秦能明を先祖に、その次子能勝より数えて九代目にあたる。祖父才助好察は御山奉行をつとめ格式御馬廻で上士であった。

幡多奉行をつとめた父好古は慶応三年七月十七日病死、ために祖父が戸主となり、新九郎は戸籍上祖父好察の嫡孫ということになる。

幼少時のことは不明だが、本町筋二丁目の島崎塾⁽⁶⁾に通い漢学等を学んだと伝えられ、「性質沈毅⁽⁷⁾」であったという。ついで幕末から明治三年迄の主要な経歴を「系譜⁽⁷⁾」からとると、慶応二年二月、文武両道に優秀であるとして国主山内豊範から褒詞を賜わっている。新九郎十九歳である。翌三年九月、奉行職深尾丹波宅において第一大隊二番小隊司令を命じられた。同年七月坂垣主導のもとに洋式兵制へ改革された高知藩陸軍へ組込まれたわけである。同年十月、第二大隊司令へ繰替えとなり第十八番小隊司令に転じ英式訓練を命じられ、十二月二十六日軍艦羽衣に乗船京都へ向う。翌慶応四年正月三日大阪に到着、伏見の戦に遭遇したため各地に派遣されたのち、京都で英式修業を命じられ七月に高知へ帰る。同年八月従来の勤役のまま分砲術局陸軍所指南役を命じられるが九月に免じられ、十月大目付軍備御用係を兼任、外輪物頭を拝命する。その後海軍に係わり、同十一月海軍局頭取となり、翌明治二年二月九日海軍指揮役且大監察を拝命、四月兼務を解かれた。幕末から維新へかけての土佐藩の活力ある動勢を反映した新九郎の経歴である。そして同年、新政府に徴用された藩の軍艦夕顔丸の船将として、函館戦争に加わることで彼の海軍軍人としての経歴を閉じる。この時の榎本武揚配下

に、のちウィーンへ伝習生として留学し銅・石版術を修得した岩橋教章がいて、ともに明治初年の洋画史に名を留める二人が官賊両軍相對していたことは興味深いことである。ただし岩橋と違って、この時期までに、国沢と絵画を結びつける資料は今のところ見当たらない。

明治三年七月、高知藩留學生の一員として渡英するに至った経過は、「系譜」によれば、まず「同三年二月十二日米國行法律科修業被仰付候」とあり、当初法律を学ぶため米國への留学を命じられていたことを伝え、同十四日東京へ出立した。ついで「同年六月十七日於東都ニ英行法律修行被仰付候」とあり、六月の時点で目的は同じく法律学習であったが、留学先を米國から英國へ変更されたわけである。同年七月二十一日、真辺戒作を長とし松井正水、深尾具作、馬場辰猪、それに国沢の一行五名による高知藩留學生はパンフィック・メール号で横浜を出港、米國を経由し九月末英國へ着いた⁽⁸⁾。

国沢がロンドンで何時頃絵画の勉強を始めたのか、つまり所期の目的であった法律学習から絵画修学へと転じた時期は定かでない。英國到着後約一年間を英語の習得にあてたと伝えられるから、具体的な学習開始は明治四年秋以前ではありえないだろう。しかし、その間既にヨーロッパ美術に接して感懐を抱いていたであろうことは想像に難くない。墓誌銘⁽⁹⁾に云う「皇國未開之業」へと国沢を転向決意させた動機は、藩留學生としての立場からも、また彼の経歴から察しても決して恣意的なものではなかったはずがないからである。ともあれいったん法律修学を開始したのちこれを断念したであろうから、英人画家に師事しての西洋画学習は明治五年初頭頃からであったと推測される。国沢の師の名前は幾通りか伝

えられるが、ここではロンドン在住の風俗画家ジョン・エドガー・ウィリアムスとしておく。その画風についても知るところが無いが、国沢の滞英中の作品「西洋婦人像」(図版Ⅱ)からすると、穏健なアカデミストのそれであったといえようか。ただし、帰国時に多数の参考図書、標本の類を持ち帰り画塾を設け、また文部省へ画学校設立を建言するなどの後年の彼の活動からして、ウィリアムスのもとの約二年余の学習は、基礎的な段階からのアカデミックな画技の修得のみに止まったわけではなからう。国沢の眼は、正則な西洋画法を日本へもたらす最初の人としての強い自覚を基に、いわばヨーロッパにおけるアカデミズムのシステムにまで当然及んでいたと考えたい。滞英中のこの間、明治六年祖父の死去に遭い七月四日付をもって新九郎は家督を相続している。

三

明治六年七月以降、国沢は政府の帰国命令を受け翌七年七月二十八日以前に帰国した。帰国に際し、滞欧作品の他、洋画技法書、参考図書、美術標本、画材等を携えていた。これらは直ちに彼の画塾彰技堂で活用されることになる。いったん高知の母のもとへ帰った新九郎は、暫くの間自宅の座敷に滞欧作を陳列していたという。間もなく母、妻、長女を帯同し上京、麴町平河町に居を構え画塾彰技堂を起した。その時期は「本多履歴」によれば、本多が国沢に入門を許されたのが明治七年晩秋とし、既に先輩として山本(「門人帖」では本山) 柄九、松林織之助という国沢と同藩出身の者が居たと記しているから、七年晩秋には生徒を募っていたと考えられる。ただし、「彰技堂門人帖」によると八年四月から

画塾の体をなしているようであるから、彰技堂と称して画塾経営にあたったのはその頃と考えてよいだろう。

国沢存命中の彰技堂は平河町の自宅を本拠としたが、教室の設置など多少の推移があった。「本多履歴」に従えば、まず京橋区西紺屋町に一等煉瓦屋を借りここに教室を移し分館とした。その頃諫山麗吉(同七月廿日入舎)が入門したと述べているから教室新設は八年七月頃であったろう。本多が教室幹事となっている。また、平河町の自宅付近に一軒借家を選んだ。これは二階北面の窓から射す光線が終日均等であることを予め確かめ、「実物写真の室」としたもので、付近の芸妓をモデルとした。この頃国沢宅には川上冬崖、横山松三郎、荒木寛畝、榊綿らが来訪し西洋画について談論したという。国沢の指導は、生徒にまず粉本を貸し与し写せることから始め、ついで木炭による石膏臨写(チョークで陰影を施させる)へと移らせた。粉本は彼が持ち帰った銅、石版画を主とし、石膏像も将来品であった。この頃国沢の人物写生の様子を初めて見た本多は、それまで床上に毛氈を敷き運筆していたのであるから、画架に画布を立てパレットと絵筆を手に「常に起立」して描く師の姿に一驚したと述懐している。

同八年中次第に門弟が増加し西紺屋町の教室が不充分となったため、新たに竹川町表通に一等煉瓦屋を借り移転、本多が幹事となり寄宿した。ここでは、国沢が将来した「各種の油絵の外に諸家より借り受けたる石版色刷のコロム絵、銅版の墨絵、又生徒の稽古画等」を展示し一般の観覧に供した。外国人、新聞記者、陸軍士官学校や各学校の教師、岸田吟香、川端玉章、高橋由一、⁽¹³⁾荒木寛畝らが観覧者に含まれていたとい

う。わが国における洋画展覧会はこのようにして幕を開けたわけである。また、国沢の「油絵に係わる彼地に於ける学説の講義」が日を定めて行われ、それを希望した六・七名の画家中に高橋由一、荒木寛畝が含まれていたという。二階に寄宿舎も設けてあったこの竹川町の国沢教室は、既に一画塾というより画学校の趣をなしていたといっている。う。

翌明治九年秋、竹川町の教室は家主の要求で明け渡すことになったため、寄宿舎に国沢の隣家を借り受け、また以前使用した西紺屋町の南側にあたる二等煉瓦屋を借りこを専ら油絵縦覧所に用いた。しかし、経営上の問題があったのかこの縦覧所もやがて平河町に移され、最後には国沢の私宅の二階全部を寄宿舎と教室にあてるに至った。毎月二十五日の平河町天満宮祭には生徒の習作を展示観覧させたという。以上が本多の回想による明治九年までの彰技堂顛末である。この間彰技堂に入門した者は、明治八年四十九名、翌九年三十四名、これに八年四月以前の五名、死去前の十年一月入舎三名を加えて総計九十一名⁽¹⁴⁾にのぼる。由一の天絵社とともに当時の二大洋画塾としての盛況が窺える。

右の彰技堂経営のほかに、当時の国沢の活動として注目されることは、明治九年四月頃と考えられるが、画学校の建設を文部省に建言したと伝えられることである。その内容は不明であるが、彰技堂をわが国美術学校の雛型とすれば、国沢はここを出発点に次の段階を考えていたわけである。一方、工部省の所管とはいえ、正規の美術学校の体裁を整えて同年工部美術学校が創設される。これに関連し、「本多履歴」は工部美術学校のこと、国沢に内談があったが宿病を理由に一切謝絶したこ

と、ただし門下生の入学は約束したと記している。文部省への建言と併せて考えると興味深い内容といえる。

しかし国沢は、工部美術学校のその後を知らないまま、明治十年三月十二日平河町二丁目六番地の自宅で死去した。享年二十九。青山墓地へ埋葬された際、墓碑にも誌されているように門弟一同幣帛を結んだ梅花の枝を投じたという。生前国沢が戯れに語った「洋葬插花之典」によったのである。いかにも最初の渡欧画家に相應しい葬儀であった。

四

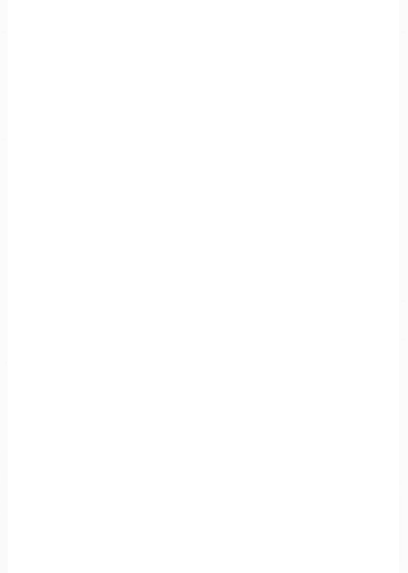
つぎに、国沢の作品について述べると、現存する遺作は現在のところきわめて少ない。「覚書」によれば、新九郎は帰国に際し、師ウィリアムスが描いた「国沢新九郎像」(挿図1)の他、自作十数点を持ち帰った。新兵衛氏が記憶にあるとして「覚書」に記しているのは、(イ)「鹿が子を連れて浅瀬を渡る図」(三尺×四尺位)、(ロ)「静物、西瓜が中心で梨、胡瓜、茄子其他」(二尺×三尺位)、(ハ)「山水、古城、肴、果物、人物等」、(ニ)「小品でマクワ瓜と茄子、果物を配した画」(「静物」挿図6)、(ホ)「小品で英国郊外風景」(「ロンドン郊外図」挿図2、焼失)、(ヘ)「横向きの西洋婦人図」(「西洋婦人像」図版II)、(ト)「西洋人(老翁)」(「老人読書図」挿図3、焼失)、(チ)「肖像」(「男の肖像」挿図5)、(リ)「猫の画(小型)」である。この内、(ニ)、(ヘ)、(チ)の三点は東京芸術大学の所蔵品でよく知られているが、(ロ)、(ト)は昭和二十年五月の空襲で焼失、その他の所在は不明である。また、図版での紹介に「ジョン・ウィリアムス像」⁽¹⁶⁾(挿図4)がある他、「海景図」(東京国立博物館蔵)も国沢筆とされている。さらに、最近調査を行

った「坂本竜馬像」(図版Ⅲ)は、国沢の作品に加えられるべきものである。したがって、現存する国沢作品として筆者が確認できたのは、(一)「西洋婦人像」(二)「男の肖像」(三)「静物」(四)「坂本竜馬像」の四点にすぎない。いずれも油彩であり、(四)を除き署名、年記はない。

そこで、右の四点について製作時期の推定と若干の解説を試みると、まず(一)は明らかに滞英中の作品、すなわち、明治五―七年の間の製作である。プロンドの長い髪を結び、伏目がちに視線を落とす婦人のプロフィールをとらえたこの作品は、ことに衣服下のヴォリュームを感じさせな



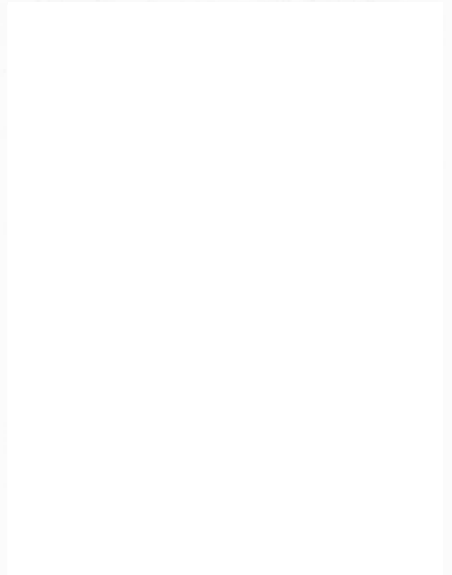
挿図 2 国沢新九郎筆 ロンドン郊外図



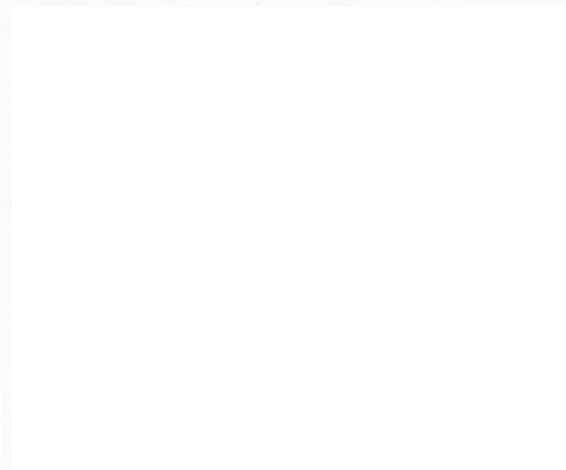
挿図 1 ジョン・ウィリアムス筆
国沢新九郎像



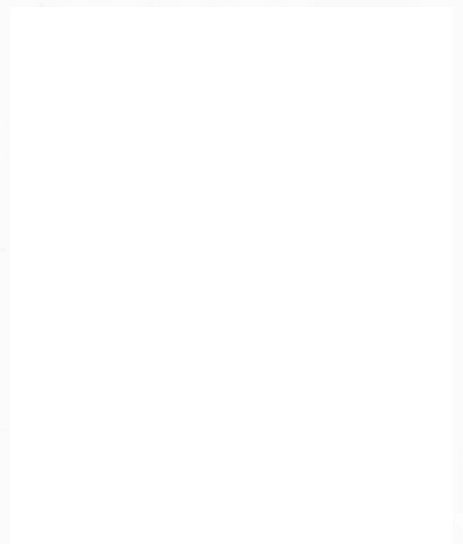
挿図 4 同 ジョン・ウィリアムス像



挿図 3 国沢新九郎筆 老人読書図



挿図 6 同 静物 東京芸術大学蔵

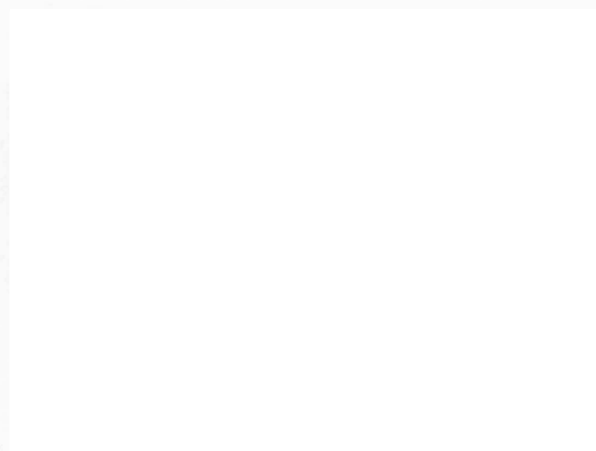


挿図 5 同 男の肖像 東京芸術大学蔵

い幾分平板な表現等に窺えるように、必ずしも人物表現に習熟しているとはいえない。

しかし柔軟な筆致を示す顔の描写には見るべきものがあり、首に巻いた黒いリボン、白いレース飾りとカメオも画面のアクセントとなつて、この婦人の温和な表情を引き出している。これらのことは、アカデミックな人物習作のひとつの段階を示すものといえ、したがって製作時期も滞英中の後半を予想させる。

これに対して、(二)の「男の肖像」は、同様に人物の半身をとらえながらいかにも生硬な描写となつていて、同一人物の作かと疑うばかりである。しかし、表現技術の上からは、明らかに滞英中の作品である「老人読書図」と比較して、量感の把握、ことに手の表現に見る稚拙さに類似点が窺えるようであり、国沢の画技のひとつの水準を示すものともいえる。それとともに、この肖像画の生硬平板な描写と製作時期を考える上で示唆的なのは、ひとつは国沢新兵衛氏によるモデルの推定⁽¹⁷⁾であり、また次に述べる「坂本竜馬像」との著しい表現上の類似性である。つまりこの肖像画は、共に留学しながら志なかばで異郷に客死した同僚への、国沢のオマージュであった可能性は十分ありうることであり、その場



挿図7 国沢新九郎筆 坂本竜馬像 画布裏面

合、この夭逝した青年の生前の写真をもとに描かれたと考えるのが妥当であろう。つまり、竜馬像同様に、この肖像が実際の写生に基づく写真と記憶をもとに製作されたとすれば、そのことが表現上においても多少の制約として作用したといえる。また、製作時期は滞英中の可能性もあるが、「坂本竜馬像」との関連から一応帰国後と推定しておきたい。

(四)の「坂本竜馬像」は、一見して(二)の「男の肖像」と非常に似通った印象を受ける。ことに顔の表現、眉、目、鼻、口の描写と、あたかも刷筆肖像画を思わせるような表情の少ない全体の把握の仕方に著しい類似を示している。また、背景の処理、筆致にも相似性が窺え、これらのことからこの作品を国沢筆と推定できる。さらに本図の画布裏には「明治九年春三月 于彰技堂描之 国沢」(挿図7)と記入されていて、これも国沢自筆の可能性が高い。したがって、本図は現在のところ唯一一年記が判明する作品として資料的な価値は高い。ところで竜馬は慶応三年十一月に没しているから、この年記に従えば勿論本人を直接モデルにしたわけではない。すでに故人である同郷の先輩の肖像製作に係わる動機は不明だが、その際写真を粉本に製作したことはほぼ疑いない。竜馬には長崎における上野彦馬撮影の立像をはじめ、幾種類かの遺影が知られているが、その中にこの肖像画に近い半身像の写真も残されている。国沢が用いたと思われる写真を断定するわけにはいかないが、ともあれ一枚もしくは複数の写真をもとに、さらに自分の記憶にある竜馬像を加味してこの肖像画は製作されたのであろう。竜馬の写真の多くは、いかにも意志的な彼の顔貌を伝えているが、国沢の肖像画では幾分視線を落した、より親近性のある表情をたたえている。対象の写真的な描写という点で

は、「男の肖像」同様に見るべきものは少なく、むしろ稚拙な感じさえするが、竜馬の上半身が画面の中で萎縮することなくその骨太な骨格を伝えているところは、写真を粉本としたという前提でそれなりの画技を示していると思われるであろう。

つぎに、(三)の「静物」は描かれている果疎類から推定して帰国後の作と考えてよいであろう。この画布が英国製であることを示す商標が画布裏ほぼ中央に刻されていて、これは「男の肖像」と同様である。いずれも帰国後の作品とすれば、帰国時に持ち帰った画布かその後英国から取寄せたものであろう。この「静物」も、国沢特有のフラットな表現によるものだが、ヴァールへの配慮はあり、柔かい光線下での親密な空間表現にはある程度成功しているといえる。一方、この作品は、高橋由一の連の初期静物画、岩橋教章の「鴨図」とともに、わが国洋画史における静物画のはしりとしても記憶されねばならない。

これら現存する四点の作品のみで、国沢の画技を測ることは困難である。ことに二点は物故者の写真をおそらく粉本としたと考えられ、したがって、渡欧画家に通有な滞欧中と帰国後の作品にあらわれる落差といった問題以前の要素もある。ここでは、ヨーロッパではじめて西洋画法の合理的な写実表現に魅せられ、「略其一二を窺ふことを得」て「勉勉従事此学を拡張」しようとしたという彼自身の言葉に止めておきたい。

五

最初に、明治初年の洋画界において国沢の存在は十分リアリティがあったと書いたが、このことに関して最後に少し付言しておこう。国沢の

業績は、すべて彼の渡欧歴にかかわっていたといっている。新帰朝者として、新しい知識が周囲から求められたという客観的な状況においてそうであり、また、彼自身最初の渡欧画家としての強い自負と自覚に支えられて行動したという意味でもそうである。と同時に、この渡欧経験が、幕藩体制以来の西欧の知識、技術の導入という功利的性格の強い時代精神の産物であったことにも注意しなければならない。事実、彼の「彰技堂趣意書」は、貴重な渡欧経験にもかかわらず、あるいはそうであったが故に、江戸後期の洋風画家佐竹曙山の西洋画論(「画法綱領」)「画図理解」以来くり返されてきた所論を踏襲確認するのに止まっている。すなわち、西洋画法の合理的な写実主義に従来の伝統絵画にない実用性をもとめ、これを国家進展に役立てようというのである。つまり、趣意書で窺う限りでは、最初の渡欧画家国沢の洋画感は、国内での先行者高橋由一等のそれとほぼ同様のもので、留学経験が反映されているというより、むしろ近世後期以来のわが国洋風画史の展開と強い類縁関係をもち、それに明治初期の特異な事大主義が加味されていた。これは、国沢自身の西洋画理解の限界を示すというより、すでに維新前に確固とした精神形成を了えて西洋へ放たれ、近代化の端緒を開いたばかりの母国に献身したいと考えた有為な青年の、当然の帰結であり典型的な姿を示すものといえよう。そして、国沢の存在が明治初期の洋画界に十分リアリティをもちえたのは、単にその斬新な留学経験が生かされたからだけでなく、右のようないわば前近代性、あるいは保守性にもよっていたと考えられるのである。

註

(1) 東京国立文化財研究所蔵写本(昭和九年八月、原本本多明氏蔵)による。

- (2) 将来品の一部は、本多錦吉郎自筆稿本「履歴書」(大正九年一月、東京国立文化財研究所蔵。以下「本多履歴」という。同書は後日校註を付し紹介する予定)に記されている。また、尾崎尚文論文「国沢新九郎・本多錦吉郎手紙の洋画技法書」(参考書誌研究)第一五号、昭和五十二年十月)に、国沢の「遺書」を含む本多錦吉郎旧蔵書中、国立国会図書館へ寄贈された洋書二十三冊の紹介がある。さらに国沢新兵衛(新九郎弟)の自筆稿本「国沢新九郎覚書」(仮題、年代不詳、東京国立文化財研究所蔵。以下「覚書」)も将来品であられ、記憶のある図書として「PENNY MAGAZINE」< SATURDAY MAGAZINE > < ANATOMY OF EXPRESSION > < BOOK OF COSTUME > の書名を掲げられ、戦災で焼失したとされる。
- (3) 「東京絵入新聞」(第二五拾七号、明治九年五月一日付)による。
- (4) 明治八年十月八日の「東京日日新聞」の記事に「昨六日竹川町十二番地の国沢某の稽古場にて、洋畫会あり」とあり、西洋人の作品、高橋由一の「乾魚の図」の出品があったと記している。ただし、これが最初であったかどうかは不明。
- (5) 「本多履歴」によれば、明治九年秋以降のことで「高橋由一氏荒木寛畝氏榊紳氏其他四五名の画家」とある。
- (6) 松岡司氏によれば、島崎七内の私塾のことで、新九郎の頃は七内の子島崎三蔵の代であろうとされる。
- (7) 「御侍中先祖書系図牒」(高知県立図書館蔵)中、「国沢才助、同新九郎指出 明治三年書込済」。
- (8) 安永悟郎著『馬場辰猪』(明治三十年)、「馬場辰猪自伝」(改造)六卷十二号、大正十三年十二月、馬場孤蝶執筆)。また、前掲尾崎論文に「国沢新九郎の洋行」として正確な紹介がある。
- (9) 東京青山墓地に所在。本山茂信撰、諫山麗吉書(明治十年四月三十日)
- (10) (一)「龍動の画家エトカワウキリヤムス」(東京絵入新聞)明治九年五月一日、(二)「英人郎著維廉義徳姪徳」(墓誌銘)ルビは尾崎論文、(三)「ジョン、ウキルカム」(本多錦吉郎著『追弔記念洋風美術家小伝』明治四十一年)、(四)「エドガー、ウキリアム」(松山白年「国沢新九郎」、「土佐史談」十八号、昭和二年三月)等。この内、(一)は国沢存命中の紹介であり、これを基にした(四)の比定は信憑性が高い。一方(三)は最も多く用いられるが、「墓誌銘」にも携わった本多の著書であるから、「ウキルカム」は「ウキリアム」(傍点筆者)の誤記誤植の可能性が高い。これらのことから筆者は国沢の師を「ウィリアム・エドガー・ウィリアムス(WILLIAMS; John-Edgar. «BENEFIT» 1911)にあてた。
- (11) 明治六年、政府は官費留学生中専門科に進んだ四十四名を除き、それ以外の百二十七名に帰国を命じ国費の節約を計った(「海外留学生改正処分儀伺」明治六年七月。同伺は七月十二日太政官の正院で認許される)。高知藩留学生五名(「英国官費留学生」)に関しては、専門科へ進んでいた馬場を除き全員帰国を命じられた(尾崎論文)。
- (12) 「本多履歴」は、最初に国沢宅を訪れた場所を麴町集町としており、岩橋草山も麴町集町の角屋敷」と回想している(「エッチング」105号、昭和十六年十月)。最初は集町に住んだのか。
- (13) 「本多履歴」に、由一(天絵社の月例展(明治九年三月以降))に、国沢と同道したことがあると記し、相互の交流を伝える。これに関連し、明治九年四月三十日浅草花屋敷での油絵展には、由一、国沢(山水図)出品)の他、横山松三郎、五姓田義松らが出品(「東京日日新聞」明治九年五月一日)。註(4)参照。
- (14) 主要な入門者名をあげると、菊地鑄太郎(八年六月)、諫山麗吉(八年七月二十日)、守住勇魚(八年八月三日)、浅井忠(九年三月三日)、藤雅三(九年十月)。
- (15) 工部美術学校に入学し画学を学んだ者は、駒峰忠臣、守住勇魚、広津正人、西敬、市川敬次郎、浅井忠、岡見千吉郎、市川力蔵、藤雅三の九名。彫刻学には菊地鑄太郎、山口直昭、田中鈔太郎など。
- (16) 『土陽美術』第四卷(大正六年二月)所収。
- (17) 「覚書」中、ロンドンで病没した深尾具作ではないかとされる。また、本図が国沢の「自画像」とされたこともあるのは誤りで、明記してある。
- (18) 「彰技堂趣意書」(「洋画先覚本多錦吉郎」昭和九年に所収)。左に全文を記す。
夫レ画ノ徳タルヤ文字ノ及フ可ラザル所ヲ摹シ言語ノ尽ス可ラザル所ヲ達シ人ヲシテ座ガラ絶海未ダ見サルノ地ヲ見、千古得テ尋ヌ可ラザルノ域ニ遊フヲ得セシムルノミナラズ夫ノ彈丸雨注ノ状ヲ写セバ、則チ碧血淋漓ノ間ニ出没スル思ヒヲナシ猛獸怒号ノ熊ヲ描ケバ、則チ戦慄畏懼ノ念ヲ生セシム況ヤ又既ニ逝ケルノ親ニ侍シ既ニ死セルノ師友ニ見ユルヲ得ルノ思ヲナサシムル者独リ此画ノ真ヲ伝フルニ非ンバ、何ニ由テカ之ヲ致スヲ得ンヤ然ラバ、則チ其信功妙用之ヲ文字ノ右ニ出ツルト云フモ亦或ハ可也是画ノ国家ニ緊要ナル所以ニシテ欧洲各国之ヲ高等学科ノ中ニ置キ徒ラニ画工者流ヲ以テ目セザル所以ノ者也本邦古來種々ノ画法アリト雖モ概ネ粗ニシテ精シカラズ其精靈真ニ迫ルノ妙ニ至テハ則チ之ヲ欧洲ノ画法ニ比スレバ、特ニ僑トノ比ノミニ非ル也余ヤ曩ニ朝命ヲ奉ジテ欧洲ニ留学シ親シク其人ニ就テ画法ヲ学ビ略其一ニテ窺フコトヲ得タリ而テ本邦ノ漸ク歩ラ文化ノ域ニ進ムト雖モ画学ノ未ダ開ケザルヲ見自ラ揣ラズ深ク杞憂ヲ此ニ抱キ胆勉從事此学ヲ擴張シ以テ皇国文化ノ万一ヲ裨補セント欲ス苟モ此学ニ志アル者ハ冀クハ協心戮力以テ益々其盛業ヲ計ラン事ヲ

国沢新九郎 識

本稿を草するにあたり、尾崎尚文氏、高知県立郷土文化会館松岡司氏に資料の提供を受け、また助言を頂きました。謝意を表します。